

北九州信徒聖書学校

第121号

月刊

על-פלי מים

流れのほとり

連絡先 〒807-8691 北九州市八幡南郵便局私書箱 26 号 本 部 TEL&FAX093(692)8592

所在地 〒802-0004 北九州市小倉北区鍛冶町 2-3-13 北九州 YMCA 内

ホームページ <http://bible-school.name/>

E-Mail hope_to_tomorrow.y@san.bbq.jp

主イエスキリストのご降誕を
お祝い申し上げます。

「言の内に命があった。

命は人間を照らす光であった。

光は暗闇の中で輝いている」

(ヨハネ1章4～5節)

北九州信徒聖書学校

理事長 山口 晶久

校 長 野村 幸生

クリスマスの喜び

前校長 森上 洋介

宿った。わたしたちはその栄光を見た。
それは、父のひとり子として栄光であって、
恵みとまことに満ちていた。

(わたしの喜び)

初めに私の喜びを書きます。私は、伊勢

湾台風が襲来した 1959(昭和 34)年 11 月、
愛知県豊川市の日本アッセンブリーズ教団
豊川教会に出席して、教会のクリスマスを知りました。それは、生まれた故郷の熊本
県菊池市から少年自衛官に採用されて、各
地で教育を受けていた時でした。教会に行
って福音を聞いたことで、私の人生は大き
く変わりました。クリスチャンになり、自
衛隊を退職して献身し、神学校で学んで牧
師になったからです。クリスマスは毎年祝
ってきました。今年で 54 年目になります。
振り返ると神さまの愛と憐みで心が熱くな
ります。現在 72 歳です。色々なことを経験
しました。3 人の子供と 2 人の孫が与えら
れました。病気もしました。46 歳のとき、
心筋梗塞を発症して重い心臓病になり、糖
尿病や肺炎を併発して身体障害者手帳 1 級
所持者になって 25 年が経ちました。これも
恵みです。少しは弱い人に同情することが
出来るようになりました。奉仕した教会は
5 教会です。この年齢まで牧師の仕事が
出来たのは主イエスさまの憐みと多くの方々
の支えがあったからです。心から感謝して
喜んでいきます。

(ヨハネが教えた喜び)

新約聖書には、イエスさまの生涯を書い

た文書が4つあります。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書です。マタイ、マルコ、ルカは共通する内容が多いので共観福音書と呼びます。独自性の強いヨハネ福音書は第4福音書と呼んで共観福音書と区別しています。ヨハネはクリスマスを『言』が受肉して人間に大きな喜びを与えたと強調しています。ヨハネ福音書の1章を引用します。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」

(1～3 節)「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」(14 節)

1 節の『言』というのは昔のギリシャ語表記で『ロゴス』と言います。これは「原理、原則、物事を中心」などを表現する言葉です。ヨハネの福音書は、「全能の神さまは人間を罪による永遠の滅亡から救うために御子イエス・キリストをこの世に送った。そして贖罪の十字架に架けた。この御子イエス・キリストを信じる者は誰でも救われる」と、強調しています。まだ救いの経験のない人は、このクリスマスに信仰を告白されるようにお奨めします。そこに大きな喜びがあります。

(主の器として選ばれた者の喜び)

マタイ福音書の1章は気宇壮大な書です。1 節から 17 節まで「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図が続きます。これで、旧約聖書とイエス・キリストの誕生の関係が概略でわかります。18 節からはイエス・キリストの誕生の器として選ばれたヨセフ、マリヤの若い夫婦の苦悩と喜びはルカ福音書1章 26 節以下に記

されています。ユダヤ人の結婚制度、聖霊による受胎の意味などを調べることも必要ですが、大切なことは 20 節にあるように、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい・・・」と、言ったことです。

ルカで福音書では「御使いガブリエルが、神から使わされて・・・」、マリヤに告げたとあります。そのときに私たちも大きな喜びを持って神様を賛美することができます。皆様の上に主の祝福がありますように祈ります。

(日本イエス・キリスト教団小倉教会担任牧師)

懐かしくて感謝

松田 淳子

懐かしくあの頃を思い出します。当時、始まったばかりの北九州信徒聖書学校に、同じ教会の姉妹と毎週二人で学校がある小倉まで学びのために通っていました。授業後はよくパフェを食べて帰えることがとても楽しみでした。振り返ってみますと私にとって、信徒聖書学校に通っていた本科2年間は「人生の決断」の時でもありました。

一つ目は、スイス留学へのお誘いがあったことです。憧れのスイス、好きな学び、父や恩師も賛成してくれた・・・。しかし、悩みの中で神さまと相談し留学はお断りしました。山口先生には相談にのっていただいたことも懐かしい思い出です。

二つ目は、牧師と結婚したことです。この結婚については、両親の賛成がすぐに得られずに祈りと家族への証の時となりました。父は、留学していろんな視野を広げてから結婚しても遅くないと思っていたようです。

結婚後は、いくつ教会を変わりましたが、

北海道の教会では 17 年と一番長く生活しました。私には 4 人の子どもたちが与えられましたが、教会の方々は子育て優先で生活することを優しく励まして下さいました。教会の皆さんに愛されながら過ごすことができました。17 年間は本当に幸せで感謝な時でした。

その後、私たち夫婦は 2 年前に北海道を離れ、今、夫は千葉県の教会で牧師をしています。私はパート勤めをしながら教会生活をしております。教会の方も勤務先の方も優しい方々で、今では千葉での生活にも馴染んで元気に過ごしております。信徒学校に通っていた頃から数えてみると、30 年近い月日が過ぎ去ったのですね。礼拝や授業で私の幼い信仰を育ていただき本当に感謝な時間でした。

私も、♪人生、いろいろ～♪ありました。でも、♪数えてみよ、♪主の恵み、と歌いつつイエスさまと歩くことができ感謝です。信徒聖書学校でお世話になった先生方、一緒に学んだ方々、お元気ですか？その節はお世話になりました。本当に懐かしく感謝です。

(1987 年卒・旧佐々木：本科第 1 期生)

主の導き

吉田 和子

九州から北海道に来て 20 年が経ちます。ただ、主の憐れみと恵みによって今日まで来ることが出来ました。子どもたちも成長し、上の娘は今年 4 月より下関の梅光学院大学で学ぶための道が開かれました。その大学のクリスチャンサークルで娘がお世話になっている姉妹のお父様が信徒聖書学校で奉仕されている柴田さんと知り、世代を超え働かれ恵みを注がれる主に感謝しています。

教会の働きを支えるためにも、私は平日契約期間のある仕事をしているのですが、期間満了近くなると色々な求人情報が気になり、時間を経つのも忘れて情報に見入ってしまう事がありました。職場まで祈りつつ車を運転していたのですが、ふと主が聖霊によって私を導きたいと願っておられるに違いないという思いが与えられました。その導きに従う時に、食べる物や着る物も備えられるに違いないから、不安な思いでひたすら自力で仕事を探すより、まず聖霊の導きを求めることが大事ではないか。そのような事を正直に神様にお話しました。現実の生活の中で不信仰な思いになっていました。次の仕事は主が必ず備えられると信じて、祈祷会で仕事のために祈った夜に、塾の先輩の先生から電話があり「公立中学の非常勤の英語講師を探しているが吉田さんできませんか？」という内容でした。短時間勤務だったので教会の事や家の事もできます。本当に主は生きておられて私の祈りに応えて下さった経験をする事ができ感謝でした。

毎週土曜日は、教会で小学生のために英語教室を開いています。クラスの前にお祈り、短い聖書のお話、そして暗唱聖句タイムなど。その後に英語のクラスを始めます。目的は伝道ですが、英語の実力を付けてあげたいという思いもあります。ですが、自分の中にある多少の英語を教えた経験や自負のようなものが、毎回のクラスで崩されていきます。“権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである”、ゼカリヤ 4 章 6 節。小さな英語教室ですが、私の能力によってではなく、祈って主の霊に導かれつつ奉仕して行きたいと思います。

信徒聖書学校で学んでいた当時の説教学の先生が「頼まれた証と食事は断るな」とよく言われていました。帯広の教会でも牧

師が出張で不在のための祈祷会など集会の奉仕を思いがけず頼まれる事があります。信徒聖書学校時代に作成した聖書メッセージを活用したりし、またどうしてもメッセージが用意できない時もありました。それでも祈りつつ委ねて集会に出る時に平安が与えられ、主が導いて下さいました。これからも、この「北の大地」で、主に仕えて参りたいと思います。

(1989年卒・旧原口：本科研究科2期生)

サンタさんの問答

うちの幼稚園と友達との問答—

「園子ちゃん、この人形さん、だれに買ってもらったの?」「クリスマスにサンタさんが持ってきてくれたの」「うそよ、サンタさんなんかいないわよ。お父さんが夜おそくかえって来て枕もとにおいとくのよ」「うちのパパは早くかえってくるんだもの。サンタさんが持ってきたのよ」

ここに二つの家庭、二つの世界がある。一つは現実であり、一つは夢である。一つは理知の世界であり、一つは信仰の世界である。自分で働いて食べる世界と、朝ごとに降るマナによって生きる世界。前者は経済学的に生きようとし、後者は愛の神への信頼に生きる。

去年の暮れ、ある病院で雑役をしている人からボーナスに「8000円もの大金」をもたらったと言って、その使い方を報告してきた。

1000円 療友に回覧するための先生の本購入

1000円 貧しい人々へのクリスマスへの贈物

2000円 御老人たちへの慰問品

500円 サさん婚約式当日の赤飯代

2000円 子供たちの冬の用意、下着、ズボン

1500円 年越し、正月用

そして、「私用に半分近くも使うことは気が咎めます」と附記してあった。

経済的に豊かでない人のこの遺口は、世の人から見ればとにかく批評もあろうが、私たち「マナ族」からすれば、頭が下がる、まことにりっぱな配分である。かつそれが経済的にも、最も安全な豊かな生活法であることは報告者自身の実生活がそれを証明している。

(塚本虎二著作集續第5巻抜粋・1985年発刊)

編集後記

寒気が頬を射す、初冬の夜風は冷たい。JR小倉駅のイルミネーションの輝きを横目にしながら学校へと急ぐ。勤め帰りか、襟を立て小走りに駅ホームに向かう慌しい人々の姿に、年の瀬を感じる。ふと立ち止まり天を仰ぐ。かすかな夜空の星の輝きに目を留めた。

疲れを覚えつつも学び舎の北九州YMCA4階教室に向かう。決められた学生当番が、毎回の礼拝で用いる讃美歌、聖書箇所、説教者名を白板に記載する。学生、学校関係者、そして説教者の10数名が共に黙し、7時からの礼拝に臨む。「Did not our heart burn within us,」。エマオ途上の弟子たちが復活のイエスに出会った経験、説教者のみ言葉の解き明かしに心は燃える。20分程の短い礼拝であるが、み言葉の力は私たちを変え、忘れかけた魂の躍動を呼び起こしてくれる。

そして、本科、研究科クラスに分かれ授業が始まる。講義は熱く活気に満ちている。時刻はすでに9時、授業は終わる。丁寧な会釈と笑顔、「来週お会いします!」「さようならー」と。疲れを忘れたかのように気分は軽やか。出された課題と聖書を握りしめ家路に着く。

一地方で始まった信徒聖書学校。1985年創立以来、その働きは絶え間なく続く。本校に寄せられる期待に応えようと励む。ご支援ご加禱に深い感謝を申し上げます。